

私の授業～うまくいったこと、いかなかったこと

所属	国際学部	氏名	齋藤百合子
テーマ	初年次教育におけるキャンパスリサーチアクティブラーニングの一事例		

はじめに

国際学部国際キャリア学科での初年次教育の一科目である「Life and Career Development 1」におけるアクティブラーニングの一事例を紹介する。アクティブラーニングの定義は、溝上の『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』において定義された「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」を使用している(溝上 2015 P7)。

国際キャリア学科は、国際学部にて 2011 年度に開設された 55 名定員の新学科で、学科科目は英語で授業を行うこと、また初年次の徹底したアカデミックな英語教育が特徴である。入学してくる学生たちは、外国籍の者、日本国籍で海外に滞在経験がある者、複数の国籍を持つ者など国際的な背景を持つ者も少なくない。そうした背景をもつ学生たちに、文科省が提唱する学士力の 4 つの柱におけるスキルや能力を伸ばすことを、Life and Career Development 1 の目的とした。

表 1. 学士力で求められるスキルや能力

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 知識・理解（文化、社会、自然など）2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力等）3. 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等）4. 総合的な学習経験と創造的思考力 |
|---|

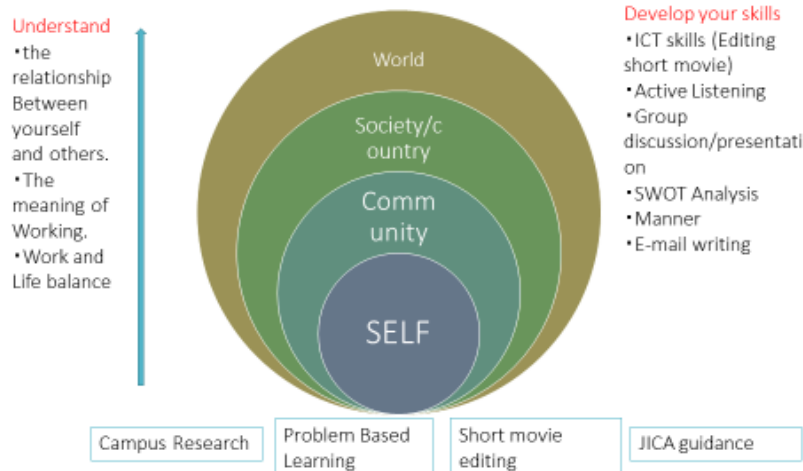
出典 文科省 「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申の概要

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm

国際キャリア学科では初年次教育は、アカデミックな基礎を習得するための「Introductory Seminar」がある。本「Life and Career Development 1」は科目の目的を実現するために、自己理解、学ぶ環境、自己とコミュニティや社会、国、そして国際社会との関係を考えるために、キャンパス・リサーチ、課題解決型教育、動画制作、国際協力を行う海外青年協力隊経験者の講義など、アクティブラーニング手法を様々組み合わせて実施している。

図1 「Life and Career Development 1」の概念図

The Structure of this course



2. キャンパス・リサーチ

(1) 目的

授業でキャンパス・リサーチを実施しようと計画した背景は2つある。ひとつは、国際キャリア学科では、初年次に必修科目が多いために、少人数クラス以外は一学年がまとまって受講する授業も多く、既存の国際学科の学生と比べて、国際キャリア学科の学生がひとつの集団として固まりやすい傾向にあった。また明学生というアイデンティティよりも国際キャリア学科生としてのアイデンティティの方が比較的強く、明学への帰属意識が弱かった。また留学生や帰国子女を中心に、本学の施設や関連部課での英語で対応に不満をもつ学生も少なくなく、学びの環境である大学の良さを知る機会が少なかった。

2つめは『大学は歴史の思想で変わる FD・評価・私学』を記した教育学者の寺崎は、自校教育という実践を提唱している。私学の立教大学で、担当する講義の中で立教大学の歴史について講義したところ、学生たちは知識欲求の満足感ではなく、自己発見、あるいは自分の「居場所」を発見したという(寺崎 2006:100)。私は寺崎の自校教育にヒントを得て、自身の所属する大学にそれほど愛着や帰属意識を持っていない初年次生に、グループでの横浜キャンパスのキャンパス・リサーチの課題とグループプレゼンテーションの課題を課した。キャンパス・リサーチを通して、明学の良さ(とくに学生を支援する各部署やそこで学生を支援しようとするスタッフの施設や教員)を知って、学生たちが所属する明治学院大学の横浜キャンパスが学生たちの「居場所」と感じてほしかった。学生たちの学び、成長する場、そしてそれを支える大学という、私たちがひとつのラーニングコミュニティであることを知ってほしかった。

(2) 方法

「Life and Career Development 1」の受講者は64名で、1年生が62名、再履修等の4年生が2名

である。この 64 名を 10 グループに分け、10 か所のリサーチを課した。10 か所のリサーチは、横浜キャンパス内の部課や研究所および国際学部に関連が深いイベント等で行うように指示した。その 10 か所とは以下である。

表 2 キャンパス・リサーチの対象部課、研究所およびイベント等

国際学部に関連があるイベントや歴史	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国際学部 30 周年記念イベント ・ 国際キャリア学科同窓会 ・ 国際学部の歴史
明治学院大学共通の部課、研究所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館 ・ ライティング支援 ・ キャリアセンター ・ ボランティアセンター ・ 学生課 ・ 学生相談センター ・ 国際平和研究所

作成 筆者

2016 年度秋学期の 10 月 3 日の授業でキャンパス・リサーチの目的や概要、方法などを説明した。リサーチの方法としては、まず計画を立て (Plan)、実行し (Do)、その結果を分析したり、ふりかえり (Check)、次にリサーチする機会がある際にはどのような行動が必要か (Action) を、PDCA サイクルとして考えるように指示した。

またリサーチする先ではかならずリサーチの目的を説明し、アポをとって担当者および関係者からインタビューすることを課した。同時に、科目担当者として該当する各部課らの担当者や関係者に学生インタビューの依頼をした。プレゼンテーションは、10 月 17 日と 24 日の 2 回に分けて実施した。

そしてキャンパス・リサーチに関する E ラーニングでアンケートを実施した。アンケートは 6 項目の質問をした。

表 3 アンケート内容

質問 1	キャンパス・リサーチ実施先はどこか。誰にインタビューをしたのか。
質問 2	キャンパス・リサーチにおけるあなたの役割を説明してください。
質問 3	キャンパス・リサーチはどうでしたか？ (5つの選択肢)
質問 4	明学横浜キャンパスがあなたの学びを支えるラーニングコミュニティであることを理解しましたか
質問 5	ラーニングコミュニティとしての明学の強みは何ですか
質問 6	キャンパス・リサーチでキャンパスの弱点に対する問題解決のための方策を考えることができましたか？

注：質問と回答は英語。

(3) アンケートの結果

まず質問3の授業内のキャンパス・リサーチについての感想だが、64人の受講者中57人が回答をした。「とてもよい」と「よい」と好意的な回答は約85%あったが、それ以外の回答者の理由は、Eラーニングの操作未熟のために聞くことができなかった。

表4 キャンパス・リサーチに関する感想 (n=57)

とてもよい	20人
よい	28人
まあまあ	7人
よくない	2人
その他	2人

キャンパス・リサーチに関しては、「いままで知らなかった明治学院大学のさまざまなオフィスがそれぞれいろいろなお仕事、学生を支援して下さることをしていることがわかった」、「自分(学生)にはさまざまな学習を支援してくれる機会が提供されていることがわかった」と、自らが所属する大学の良さがわかったという意見が多かった。学生のアンケート回答では具体的に以下の記述があった。

表5 MGU 横浜キャンパスは学生の学びをささえるラーニングコミュニティであることを理解したか

図書館	飲食できるスペースやおしゃべりできるスペースがあることに驚いた。図書館に入館するのははじめて。図書館のイメージが変わった。楽しめるようになった。
キャリアセンター	スタッフが学生の就職活動支援に工夫しながら力を尽くしてくださっていることがわかった。将来、活用したい。
学生相談センター	学内にカウンセリングルームがあることを知らなかった。学生に必要な場所だと認識した。
学生課	以前は教務課と学生課の違いがわからなかった。でもこのリサーチでその違いがわかったし、学生課がさまざまな学生支援をしていることがわかった。
ライティング支援カウンター	日本語ライティングが必要な学生にだけ役に立つのでは？
国際センター	留学だけでなく、インターンシップなど多くの機会があることがわかった。
ボランティアセンター	ボランティアセンターではが学びにつながる多くの活動が用意されていることがわかった。
国際平和研究所	核廃絶など具体的な平和運動や学生サークルの存在を知れてよかった。深い理解につなげることができると思う。

さらに、リサーチ中に課題があったか。それをどのように解決したらよいか、との間には以下のような回答があった。リサーチ中の課題の問いには、リサーチした対象の事業に対する課題のほか、アポの

とりかた（メールに頼りすぎて、直接対面することを遠慮しすぎていたなど）、リサーチする学生自身の態度やリサーチしたことを表現する英語力、もしくはグループワークに関する課題（グループ内のメンバー間の作業量の違いなど）、発表方法やプレゼンテーションスキルに関するもの（パワーポイントの作成方法の未熟さ）、国際学部に対する課題（ネイティブの教員が少ないなど）またさまざまな回答があった。

表 6 どんな課題を見つけたか。またその課題をどのように解決すればよいと考えるか

図書館	図書館はいろいろな機能があって使いやすいところなのに学生はそのことをあまり知らない。学生が口コミなどで伝えていく必要がある。
キャリアセンター	さまざまなガイダンスが一日だけの機会しかないのが残念。もう少し回数をふやしてほしい。

3. 結論

初年次の学生たちにとって、「Life and Career Development 1」の授業のアクティブラーニングとしてのキャンパス・リサーチは、学生が所属する大学と大学におけるさまざまな学生の学びを支える資源があり、研究活動が行われている機関であることを理解する上で一定の効果があったと考える。また、私自身も学生のある一面を理解する機会となった。たとえば、大学教員は教える（教育）だけでなく、研究活動をしていることを知った、学生課と教務課の違いを知ったなど、高校から大学への移行（トランジション）が不十分なまま、授業での課題に追われていた、ということを理解した。

また、キャンパス・リサーチというアクティブラーニングを通して、学士力として求められている汎用的な能力の向上にも寄与したと考える。具体的には、自身とコミュニティ（大学は広義のラーニングコミュニティ）との関係を理解することを通して、組織や社会を理解し、インタビューのアポをとり、あいさつし、話を聞く、というリサーチの行為がコミュニケーションスキル等を伸長する。さらにグループワークすることで集団の難しさ、時間のマネジメント、プレゼンテーションなど人に伝える方法などについて意識的になり、向上させようとする。

しかし、キャンパス・リサーチの発想の元となった寺崎の自校教育とは大学の歴史に触れることである。今回のキャンパス・リサーチは、時間軸としては現在、空間軸としては明治学院大学横浜キャンパスという狭い面であった。今後は時間軸を過去と現在をつなぎ、創立者のヘボン博士をも巻き込んだアクティブラーニングの方法を開発し、学生たちの自校理解、「居場所」の深化につとめたい。

1. 知識・理解（文化、社会、自然など）
2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力等）
3. 態度・志向性（自己管理力、チームワーク、倫理観、社会的責任等）
4. 総合的な学習経験と創造的思考力